

# 堀口大學——「くら園坂」の登り降り（大森望翠樓ホテル）

長谷川郁夫

（補足として、ここに記しておきたいことがある。）

大正六年一月、スペインから帰国した青年は、――

二月四日、牛込余丁町七十五番地に永井荷風を訪ねた。

五日に投函された荷風書簡に、「昨日は突然の御来車誠に

失礼の段何とも申訳無之候」とあるところから、それが知られるのである。また、宛先が「四谷区塩町一丁目二十九番地藤崎様内」となつていて、大學青年がまず身を寄せたのが、おそらく親戚筋の家だつたらしいことも。

いきなりの訪問に、荷風は例の居留守の術を使つたのかも知れない。「実は去年三田を退き候以来全く来客を謝絶致し病氣撲生致居候」などとの弁明につづいて、

……レニユーの新著又々御惠贈に与り御厚情かたじけなく存候過日西班牙より御送付被下候ロメーンミルモオルの一巻老大家の沈着なる筆致啓發する処歎らず候折から又々今

し頂くようにして大切に持ち帰つて來た。それ以前の来簡數通もまた「命の次に大事なもの」ではあつたが、ドイツ軍ベルギー侵攻の報を受けてブリュッセルを発つ際、命と引きかえに居室に残したまま、失われてしまつたからである。荷風の手紙は、フランス語のアドレスが毛筆で見事に記され、頭文字には細い毛筋がきて花飾りまで添えられたものだつた、という。そこに「いかにも懇々たる筆を動かしておいで様子」が偲ばれた。縦長の封筒は無地の上質鳥の子製、文言は太々とした書体で厚手黄唐紙の巻紙に整然と綴られていた（師恩の章）。

片時も忘ることのできないのは、（五年）三月二十一日附の第一信だった。「パンの笛」詠草や詩稿「夕べの思」、サマン詩の訳稿とつづけて送つたことへの返事で、そこには、……扱儀此の二月にて慶應義塾並に三田文学と関係を断ち少し心静に勉強致度存居い處又々人に勧められ柳山書店より文明と申す小雑誌發行致す事と相成申い四月より第一号売出申いサマンの詩は文明第二号に頂戴致つつもり此儀何卒御許被下度願上申い文明は小生一個の經營にて柳山君と久米君（久米秀治——引用者・註）との外は目下の處誰も深き関係無之申い御寄稿の程何卒願上申い三田文学の方へ井川君（井川滋——引用者・註）と石田幹事の二人編輯致され居いに付き三田向の御草稿は何卒直接其方へ御送却て便利かと存じい

回の新著昨夜より直ちに読始め申候。此度は長く日本に御滞留の御見込みに候にや近日改めて当方より御詫びに參上致しいろ／＼御叱しも致度存居候兎に角以手紙失礼の段くれ／＼も御詫申上候

と記されている。「ロメーンミルモオル」Romaine Mironaultはアンドレ・レニエの小説。前年八月の手紙で、「アソリイドレニエーの新作小説にてかのプラトオドラツクの後丁度戦争始りの時分メルキュール社より出でたるもの有之申候R——何々と女主人公の名前らしきもの表題に致しありしと存じいへども忘れ申しも御存じにても申はゞ御送り被下度懇願奉り」と、探して貰つた本である。青年は帰朝報告の土産に、またレニエの新刊一著を持参して、喜ばせようとしたものらしい。

マドリッドで受け取つた荷風からの手紙二通を、青年は押

と、個人誌「文明」の創刊が告げられ、荷風宛てに送られた草稿は、サマン詩訳稿以後、これまでのようになに「三田文學」ではなく、新雑誌に載せると記されてあつた。「三田向き」は井川か石田に直接とは、実際的な助言といえる。この丁重な印象の、実務報告のような文言の奥から聞こえるのは篤い理解と激励の声だつた。それがどれほど新人訳詩家の意を強くさせるものであつたかを思う。

この手紙の文面が私に語りかけてくれるのは、「明星」「スバル」の「歌の子」だった「堀口大學」を、フランス近代詩の翻訳者として育てたのが、いうならば編集者・永井荷風であつたことである。「師恩の章」（昭和四十四年）では、堀口さん自身が「喜寿すぎて師恩いよいよ有難く風門の二字を名の上に署す」との「腰折れ一首」のもじり（「風門の二字を名の上に署す」の一首があつたからである）を添えて、「風門」という語を思い付いている。「與門風門大學生」と門を重ねて署名せざばなるまい、と。

レニエ、ノワイユ夫人、サマンなど、関心の重複を指摘するまでもなく、「月下の一群」の詩的感覚は、一面、「珊瑚集」からのバトン・タッチであつたといえるのである。

帰國すれば、すぐに訪ねなくてはならないのが荷風宅だつた。前後して、青年が與謝野家を訪れていただろうことはいうまでもない。

137 堀口大學

\*

「詩人」に宛てて、興津から詩「エミル・ヴエルハーレンの死」一篇を送ったのは、同人中の白鳥省吾、富田碎花の詩的傾向を気遣つての、挨拶であつたかも知れない。柳澤健から送られた既刊分のうち、大正六年二月の第三号が特集「エミール・ヴエルハーレン号」だったからである。

エミール・ヴエルハーレンはベルギーの詩人。わが国には、上田敏によつて紹介され、象徴詩六篇が「海潮音」に収められた。しかし、十九世紀末、社会主義に接近して、象徴派の幻視者（グールモンは「仮面の書」で、かれを「幻覚の詩人」と称した）は、人類の善意を信ずる未来志向の詩人となる。第一次大戦前夜には、その健康な理想主義が欧米全土、また日本に影響を及ぼしていた。喻えるなら、新時代のホイットマンとして、である。

すでにカーベンターの訳詩集「民主主義の方へ」（大正五年）一冊を上梓して、のちにホイットマン「草の葉」全二巻（大正八年）を訳出する碎花や、第一詩集「世界の一人」（大正三年）あたりからホイットマンへの傾倒を示していた省吾には、ヴェルハーレンの名前は輝かしいものであったと思われる。かれらは、やがて民衆詩派の中心的存在となる。大正期の時代思潮の一つのあらわれだった。

ヴェルハーレンの死は、一九一六（大正五）年十一月二十七日。講演旅行の途中、フランスのルーアン駅構内で列車に「寄贈新刊」の欄に、萩原朔太郎詩集「月に吠える」が取りあげられ、詩の世界に大変革のときが訪れていたことが知られるのである。

（中略）  
堀口君とは未だ面識はない。併し、その制作、その翻訳によつて、君の風貌と思想とは、自分に極めて親しいものである。君も、自分に逢う日を希てゐると言はれる、自分は、その歓びの日を待つて止まない。

堀口君が、最初、同人に加はることに就いて最も懸念された点は、「詩人」の傾向と、御自分の夫れとが、隔りがあるといふことであつた。併し、「詩人」には傾向は無い！あるのは、各自の稟性だ、趣味だ、思想だ、若し強いと共通なものを探せば、それは前にも言つたやうに、相互

繋かれたのだという。大學青年がスペインを立つ間際の出来事だった。

「エミル・ヴエルハーレンの死」は、「詩人」大正六年五月号に掲載された。「十一月はさびしい！」何と云ふいやな天氣であらう！」とはじまる三連の詩篇だが、後半二連を引いておきたい（「仮面の書」には、「十一月の荒々しい風、／風」という詩行を含むヴェルハーレンの詩が引用されている）。

木の葉は街の敷石の上に

泥まみれの靴底に踏みにじられ、

四辻の広場に立つて

銅像は途方に暮れてゐる！

何と云ふさびしい夕暮であらう！

この時です！

悲しいヴェルハーレンの死の報知は

無数の戦報の間をぬけぐつて

稻妻の様に青白く輝き乍ら

地球の表面を縦横に走る！

千九百十六年十一月末のある日！

堀口訳によるヴェルハーレン訳詩は、「失はれた宝玉」に収められた「新しき市」と、「月下の一群」収録の「風車」

の友誼と、詩に対する熱情とである。

兎も角、堀口君によつて、わが「詩人」は、若い仏蘭西流の詩人の一人を加へ得た訳である。君の高雅な趣味、若い情熱、醇化されたテクニック——自分の最も欲してゐるところのもの、これを、「詩人」のなかに見ることができるのを、限りなく悦ばしく思ふ。

ここから、大學青年を同人参加へと動かしたのが、柳澤の熱意であり、なによりかれのフランス憧憬であったことが読み取れるだろう。

「詩人」グループが、上京して上野・精養軒に投宿した新同人の歓迎会を開いたのは、五月末のことだった。この会で、佐藤春夫のほかに同年輩の詩友をもたない大學青年は、西條八十、日夏耿之介、白鳥省吾、山宮允、柳澤健らを識った。

そして、「快活な水先案内人」には、「会場に選ばれた大森の真珠いろの海を見はるかす丘の上の望翠楼ホテルが気に入つて、翌日早速、それまで泊つていた上野の精養軒ホテルを引きはらつてここへ移り、……」と記されている。

大森望翠楼ホテル。そこは、堀口さんには格別に馴染み深い場所となる。

大森駅王口の南方、暗闇坂を隔てた小高い丘に建つホテルだつた。「日本の鶯」に、「甲州出の横浜在住の若尾」という財閥が経営していました。横浜県庁だつた建物を払い下げて貰つて、大森へ建て直したというものだから、材料はオーケ

材をふんだんに使つて素晴らしいし、設計は英国人だったといふので、天井は高く取つてあるし、正面の階段なんて幅一間もあって、それは堂々たるものでしたよ。そういうお金持の道楽経営みたいなホテルで、部屋数は十ぐらしかなかつたかな」と、詳しく述べられるほどに懐しい過去なのである。

大森に移り住んだことが、「堀口大學」という詩人が形成されるにあたつて、重大な意義をもつこととなつた。二つの出会いがあつたからである。

日夏耿之介との親交が生じた。

二つ歳上の日夏は二十七歳。三年前に早稲田大学文学科を卒業して、在学中に西條八十らとはじめた同人誌「仮面」(二年九月に「聖盃」と改題)が四年六月に廃刊となつた後は、「早稲田文学」「文章世界」や、萩原朔太郎、室生犀星らの「卓上噴水」「感情」などに詩作を寄稿していた。新進詩人として、五年には鎌倉に住んで、芥川龍之介、萩原朔太郎とも交際があつた。六年四月に大森山王に転居、五月現在は、印刷所に託した第一詩集「転身の頌」の本文が刷り上るのを待つところだつた。「詩人」五月号の「卓上雑話」という同人欄に、「表紙は京都の染屋から染め上つて来た。版画七枚もタイトルページもエッチングのデザインも金版のデザインも出来上つてゐる。本文さへ刷上れば他は出来てゐるのであるから五月には出来上る」と、焦心の思いが記されている(実際の刊行は、さらに遅れて、六年十二月となつた)。

（やあ！）

（おう！）と

外見はいかにも気易げたが

何か芯の残るあいさつを交しただけで

立ち止りもせずに行き過ぎた

そのあとでHが僕をかえりみて

「あれが室生犀星だよ」と教えてくれた

その時の君の姿は（忘れもしない）

まだ一度も水をくぐつたことのない

ぱりっとした久留米がすりの

素袷の腰に

荒縄を

帯の代りに巻きつけていた

その荒縄がうららかな春の光りに

黄金さながらに照り輝いたこの時が

鬼気に似たものを

君に感じた最初であつた

とつづく。「H」は日夏耿之介。「何か芯の残るあいさつ」

とあるところ、この一瞬、青年の胸裡を若い才能が詩壇で競い合う熾烈さが掠めたかも知れない。「鬼気に似たもの」

日夏は、のちに「堀口大學の藝術」(明星 大正十年十二月号)という評論文のなかで、「三田文學」大正三年二月号の「私窓児の死」を読んで「初めて彼の長詩篇の優秀を眺め得た」と記している。柳澤健とおなじく、面晤以前に詩人・堀口大學を認める一人だつたのである。

暗闇坂では室生犀星の特異な姿を見かけたこともあつた。

君を最初に見たのは

(ふしきなほどはつきり覚えているが)

一千九百十七年五月も末の

大森の「くら闇坂」下の道だ

と、「犀星詩人昇天の日に」の「二だん」は歌い出されてゐる。この詩は題名が示す通りの、昭和三十七年三月の犀星追悼の一篇。全六段の物語詩のような長篇で、「二だん」は、

晩春のその日の空は

うららかに晴れていた

君は独りで、海岸の方角から歩いて來た

僕は、これも詩人のHとあの坂下を

駅の方へと歩いていた

君とHは

知り合いの仲らしく

という詩句が、そんな観察を裏書きするのである。

あの時代 詩を書くことは滅亡への道だった  
「くら闇坂」の登り降り

と、「三だん」はこの二行にはじまるものだつた。

長谷川潔との出会いは、望翠樓ホテルのサロンで開かれた作品展で、一枚の着色版画に魅せられたからだ、と「日本の鶯」には語られている。「赤い月」という題で、緑の林の上にかかつた赤い半月。単純な構図なんだけど、そこに余計魅きつけるものがあつてね、神秘的ですらあるんだ。すぐその絵に赤札を貼つて貰いました。売約の。五円でしたね。それがご縁で（つまらない洒落ね）彼との深いつき合いが始ることになりました」と。

長谷川潔は明治二十四年十二月(九日だから、大學青年より約一ヵ月早く)、横浜・戸部に生まれた銅版画家。病気がちな少年時代を過ごしたが、画家を志して、二十一歳で葵研究所に入り、黒田清輝に素描を学び、本郷研究所では岡田三郎助、藤島武一から油絵の指導を受けた。大正元年創刊の「聖盃」に画家として同人に加わり、その表紙デザインを第四号(三号までは石井柏亭)から永瀬義郎と交互に受け持つこととなり、自刻木版画をはじめる動機となつた、という(竹本忠雄編「回想録」)。やがて銅版画が生涯の仕事となるが、その技法はバーナード・リーチの助言を得たものだつた。

十歳のときに第一国立銀行大阪支店長の父を、十九歳で母を喪う。以後、大森山王に宏壯な洋館を借りて、暁星中学に通う弟・弘と二人で住んでいた。

「当時の居をかまえていた大森の山手は、画家、文士、詩人、歌人、音楽家などが騒然と起居往来する一個のバルナス的中心であった」と、潔は回想する。

……いずれも大森木原山の住人ということから、日本画の小林古径、川端龍子、洋画の白瀧幾之助、水彩画の真野紀太郎、洋画の鶴田吾郎などと語らって木原会なる画家のグループを結成するはこびとなつた。同地の望翠樓ホテルのサロンをかりて毎年われわれは展覧会をひらいた。野心のまつたくない、気持のいい会だつた。

とあるところから、大學青年が長谷川潔を発見したのが、この「木原会」展覧会においてであつたろうと推察される。

また、「バルナス的中心」に関連していえば、大森山王・木原山の洋館には、「仮面」のメンバーを中心とする潔の友人の文学、美術青年たちが集つた。「女中一人だけを使つての氣楽な生活だつたから、客の方でも遠慮気兼ねがいらないので」とは、大正三年五月に「仮面」同人に加わつた美術評論家・森口多里の回想で（『明治大正の洋画』）、

その頃の山王は未だ閑寂で、途中の静かな路の傍に山椿

の大木があつて、日陰になつた狭い地面に真赤な花が点々と落ちてゐたのを、憶えてゐる。集る者は二十代の血氣盛りで、未だイデオロギーなんといふ言葉に取憑かれなかつた時代であつたから、その集合は文化的な梁山泊といふ観があつた。場所は二階の広間で、その硝子のケースには南蛮的な、長崎的な、或は明治初年のガラス器が沢山並んでゐて、異様な興味をそよるのであつた。そして集つた人々は夜の更けるのも知らずに怪談と猥談とに打興じ、漸く夜明けに近い時分、勝手にそちこちの場所を選んで寝るのであつた。

とつづいている。

潔の回想には、「奇異なる超俗的詩境と端倪すべからざる学殖とによつて『仮面』グループ中の重鎮をなしてゐた日夏耿之介とは、たまたまかれが大森の拙宅付近に来住してから、急速に友情関係を深めた」とある。「転身の頌」の装幀、また木版挿画七点の制作は潔の手になるものだつた。

堀口大學も、耿之介と同時期に私が親交をむすんだ詩人で、積年、詩画協力を通して友情のよしみをかわしてきた。当時、多年の外遊をおえて帰国したばかりの大學は、つきつきと詩集、訳詩集をあらわして江湖に名を成したが、その装幀関係はすべて自分の彫つた版画作品であった。逆の立場から、私の渡欧後は、拙作にたいしてよせられた。

れたフランス批評家の文章は、大學の名訳によつてしましばれば故国の文芸愛好家のあいだに知らされることとなつた。

「多くのすぐれた友人のなかで、仕事のうえから特別に深い接触をたもつたのが、日夏耿之介と堀口大學である」とあらうように、大森山王の地で、日夏耿之介、長谷川潔、堀口大學の友情は醸されたのだつた。

序でに記すなら、大學青年との似通つた境涯を思わせる一例として、潔にも、伯父たちに「潔は外交官むきだから帝大で仏法（フランス法律）でもやつたらよからう」と勧められ、高等学校の受験勉強に取り組んだ一時期もあつた。

「月に吠える」（大正六年二月）の出現は、版画家・田中恭吉のカヴァー装画、恩地孝四郎の表紙装画が近代的感性の、病める神経の颤えを表徴して、朔太郎の言語空間を際立たせることで一層衝撃的な事件となつた。長谷川潔のエキゾチックな筆致の黒刷り木口木版画による日夏、堀口詩集の装幀もまた、「ゴシック・ロマン詩体」と称される壮重な漢語多用のボエティック・ディクションを、あるいは優美な手弱女ぶりの詩語の世界を、柔らかく包んだ清楚な印象で、新時代の抒情的美意識を表出するものとなる。ともに、詩と美術、音楽が一体となつて奏でた、大正ルネサンスともいべき文化的活況に鮮烈な彩りを添える典型例となつたのである。

とあって、エキゾチックな雰囲気が強調され、「いろ赤き弦月よ！」の一言には、たしかに、リュナティックの相似る魂を見出した感激が確認されもするのである。

望翠樓ホテルの一室では、受験準備に追われていた。これまで無関心だった法律や経済、外交史、商業史も、「やつてみれば、それぞれ面白かった」のである（「とつときの話」）。しかし、独習に専念できなかつたのは、傍らに置かれたフランス翻訳詩の、あの「堅牢なノート」の誘惑があつたからだつた。「余暇を盗み」とあるが、帰国を前にした慌しさのなかでも、クローデル「真昼の聖母」、ジョルジュ・デュアメール「介在の王国」、ノワイユ夫人「若さ」などの試訳が加えられていた（それらは大正六、七年にかけて、「文章世界」に発表される）。

大森に移つてからも、「七、八月の頃、ジャン・マルク・ベルナール、ジャン・ラオール、フェルナン・グレーヴ三家の月の名詩各一篇ずつを訳して自ら慰む」と、「月下の一群」の成立に記されている。これは「文明」六年十一月号に寄稿した「月三趣」のことと思われるが、「文明」同年四月号にも「丸き月」（ゲラン）、「尼の如くに青ざめて」（タイラッド）による「月の詩二章」が出ていたところから、興津滯在中にも訳詩の試みはつづけられていたものと観察されるのである。

一方、柳澤健の友情もまた、さらに昵懇なものとなつた。知り合つたばかりの北村初雄を、大學青年に紹介したのも柳澤だつたろうと考えられる。

また、七月に出版された「吾藏と春」の読後感「『吾藏と春』を読む」（現代の詩及詩人所収）には、獨白めいたこんな記述もみられる。

著者も亦私と同じく、婦人魂の所有者である。併しながら、そこには過度な纖弱と過度な感傷とがない。優しい婦人魂の所有者だけれども、嚴肅さと寛宏さとの精神はいつもこの若者にある。従つて、アルベール・サマンの脆弱纖弱な婦人魂よりも、かのアンリ・ド・レニエの優婉典雅な婦人魂に、著者の心は惹かるべき筈である。爽涼の微風、藍色と黄色との模様に燐いてゐる海洋、微笑と会話、美くしい宝石、人形、童話……著者の好きなものは斯ふしたものである。優しく軟らかであるが、しやんとした健やかさがあるのだ。

健が同時代の詩人たちの間に探し索めていたものが、「婦人魂」と呼ぶ、魂の同質性であったことが知られるのである。

安部宙之介「詩人北村初雄」（木犀書房・昭和五十年）といふ本があつて、そこには三木露風、柳澤健、堀口大學、さらには芥川龍之介、矢野峰人、矢野目源一、西條八十、日夏耿之介ら多くの詩人、文学者から初雄に宛てられた書簡が收められていて、近代詩史の貴重な資料となつてゐる。同時に、初

北村初雄は明治三十年生まれ、大正六年には二十歳の青年だつた。

神奈川県立第一中学に通う頃から詩作をはじめ、三木露風に私淑、一級下の熊田精華を誘つて同人誌「チョコレート」（他の同人に片山敏彦、山名文夫ら）に参加した。中学卒業後の一年、慶應義塾予科文科に籍を置いたが、六年四月に東京高等商業学校に進んでいる。一月に創刊された露風による第三次「未来」の同人となり、七月に出版される予定の、中学卒業記念の第一詩集「吾藏と春」の出来上りを待つところだつた。

柳澤健との交際は、おそらく、「未来」への訳稿依頼のためだらう、横浜・南太田に住む初雄が六月初旬のある夜、戸部の遞信省官舎に健を訪ねたことから始まつた。

初対面の印象を、健はこう記している。

……私位背の高さがあつて、稚なさの響きと表情が未だ痕跡をのこしてゐる快活な高い話声、端麗な面差ざし（希臘的のといふ言葉は君を悦ばずかも知れない）、青年らしい生々しさといふより寧ろある静かさと深さとを思はせる眼光——そのとき君は、軟らかいネルを着てゐた。君は、ロセツチを語り、シモンズを語つた。私は、キーツと、それから他分サマンを語つた。夜も更けて、時計は十二を指した。君は極めて好もしい印象を自分に残して官舎を辞した。（新しき三詩人）

雄は大正十一年十二月に二十五歳と十カ月で夭折するが、かれが周囲からいかに嘱望された詩人であつたかが、それぞれの書面から熱く伝わるのである（「あとがき」には「この書を堀口大學先生に献じる。先生は慈愛の眼でみつめていて下さつた。そしてあたたかく激励して下さつた。ありがたいことだつた」と記されている）。

「一九一七、七、二六」の日附をもつ、大學青年の第一信は詩稿で、マリー・ローランサンを慕うものと仮想される、あの「遠き恋人」（手紙では「おもひで」）の原型であることが、健の紹介で、初雄に「未来」への寄稿をもとめられたことへの返信であつたと想像されるのである。

第二信は、Hotel Bousui-Roの便箋を使って八月三日朝に書かれたもの。

昨夜はいい月の守でしたね。

おそくなるまでホテルの露台に出て一人で月を眺めて居りました。浴衣の肩が夜露（月の涙でせう）にしつとりと濡れる頃まで。色々のことを思ひ出し乍ら、そしてこんなことを思つて見ました。

（詩人であると同時に

むづかしいことです。

何故だか私が云いませうか。

詩人は月光を愛するのです。

それなのに、恋は月光を怖れるのです

それごらんなさい……。)

と、謎々遊びめいた冗談を記すほどに、早くも親密に打ち解けた文面となつてゐる。

八月十六日の第三信は便箋何枚にも綴られた長文で、訳詩稿依頼への返事だつた。秋の近づく気配を感じながら、ヨーロッパの秋を懐しんで、切々と訴えている。「私は思ひ出す。國の秋はみにくかつたことを。私は美しい秋をまつてゐるのです。それなのにみにくい秋が来ようとして居るのであります。あゝ！ 私は秋をまつことさへゆるされないのでせうか？」などと。

大學青年が受贈した「吾藏と春」をすでに読んでいただろうことは、文中に、「今日の時事に柳澤君の感想が出て居りました。大変気のきいた快いものでした。あなたの御新著のことをしきりに賞賛して居られました。私は同感を以つてそれを読みました」と記されているところから察せられる。

「詩人北村初雄」には、「(去りし千九百十七年の秋の作にかかり堀口大學に献じたるもの未だ発表せざりしものとす)」との詞書きが添えられた、「幻想」と題する初雄の三連二十一行の詩篇の切り抜き(誌名不明、という)が掲げられていて、これは大學青年を慰めようと記されたものであつたとみられる。その第三連は、

我漕ぎて彼の湖島の草小屋に渡り、  
その朽にし藁屋根の上に、  
汝が背と腕と顔とを培養はむ青白き夏の薄明を  
黄蜂のうなり聞ゆる朝の刻まで、  
かくて透き通ほる美はしき花そこに生ひ立ち、  
わが接吻に大きくみ開きて、  
咳きつつそこにみからむ泡雪の如く。

といふものだつた。

「度々のお便りと、そして幻想とありがとうございました。ことに幻想をありがとうございました。ことに最後の幻想を」とはじまる日附不詳の大學生書簡一通は、「幻想」の草稿を献じられたことへの礼状だらう。「あなたのこの幻想は私に親しいのです。私の秋の心に親しいのです」とある。

……あなたは知つてゐますか？ 春でも夏でも冬でも(秋は勿論でせう)私は秋を感じ、私は秋の詩を書いてゐることを。その筈なのです。(私はさう思ふ！)秋は私の魂である。先頭にも秋の詩を一つ書きました。然しこの歌はあなたへは捧げかねます。何故と云つてあなたはこんなさびしい歌を決して唇に上せてはいけない「若人」だから。お暇の折りにはお立ちより下さい。お話でもいたしませう。

戻ったばかりの八月下旬のことであつたと推定される(「湖島」一語のイメージは、中禅寺湖か北海道の湖を想い浮かべたものだらうか)。見たことのないヨーロッパの秋をこと更に讃美する青年に、初雄がどのように反応したかは、この段階ではまだ判らない。子供扱いされたことにも、いくらかの不満が残されたらうと推察されるのだが。

ささやかな感情の齟齬が、間もなく初雄から柳澤健に漏らされたとするなら、この手紙もまた堀口さんが詩壇で誤解を受ける、小さな因子の一つとなつたといえるかも知れない、と思う。

「秋の詩を一つ」とは、「詩篇」七年二月号に発表の「秋よ！」である。

私は秋の来るのをまつてゐる。しかし、このとき青年のこころは二つに裂かれていた。「シャンゼリイゼのマロニイの葉の黄ばみ初めるのも、もう間もないことでせう。そして私はそれを見ることが出来ぬのだ。だから私はこんなにさびしいのです」との文言が、第三信のなかにみられた。そして、「私は思ひ出す。國の秋はみにくかつたことを」とも。

秋の来るのをまつてゐる、しかし、このとき青年のこころは二つに裂かれていた。「シャンゼリイゼのマロニイの葉の黄ばみ初めるのも、もう間もないことでせう。そして私はそれを見ることが出来ぬのだ。だから私はこんなにさびしいのです」と、日本のかなしい秋を懐しんだ青年なのである。

だが初雄には、シャンゼリイゼの秋といわれても、それは憧れのなかに存在するものに過ぎない。前年秋に日光・中禅寺湖を旅し、また「幻想」一篇を認めたのも、北海道旅行から無論のこと、これらの言は、新詩社ふう美意識の誇張に包まれている。ヨーロッパにあっては、「そぞろ日本を思はしむ」と、日本の秋を懐しんだ青年なのである。

また、秋よ！ 汝が果の青ざめしわが前額の如く  
わが心を匂はしむるは、おお秋よ！  
汝がかなしき落葉なれば、

また、秋よ！ 汝が果の青ざめしわが前額の如く  
冷たき忘却と死滅の冬につづけば、

秋よ！ この夕！ 紅き木の葉のしげくもふるよ、  
わがやさしく傷き易き心の  
お如何に、如何に血をば流すよ！

秋よ、瘦せて戦く汝が腕の中に

抱けかし、抱けかし、傷きしこの心！

傷きしこの心、汝が腕の中にぞ

甘味き死のねむりを味はん！

「詩篇」（巡礼詩社）は小田原時代の北原白秋を顧問として六年十二月に発刊された月刊の同人誌。日夏耿之介、室生犀星、萩原朔太郎、大手拓次、木下奎太郎らとともに、大學青年も熱心に寄稿した。

\*

ヨーロッパの大戦に大正三年八月、日英同盟を理由として極東で参戦した日本は、戦後の新時代に備えるため、外務省では人數を大量に増員するとの情報が入って、独学青年のいわば“ドン・キホーテ”的野望を煽り立てた、という。

論文試験の合格者は百四十人ほど。つづく筆記試験の結果で三十人程度に絞られるのである。

十月三日。筆記試験の一科目に、「口述要領筆記」があつた。試験官が早口で十分間ほど読み上げた口述文の内容を要約するもの。制限時間は一時間だった。

ら、昭和二十年以降の執筆と推定される）。ただ、私にも、葉山のお宅で堀口さんの口から、試験場で緊張のあまり「小便をたれた」と、冗談話のように聞かされた覚えがある。それが、いかにも青春期の柔弱だった堀口さんを彷彿させるようであ面白かった。

ところが、これまで外交官試験放棄については、「第一次の論文鉢考、第一次の筆記試験には合格したものの、九月、口述試験のおり、病氣再発、ついに外交官の道を断つ」（年譜 平田文也・編）などとされてきた。「全集」版で「九月」が「十月三日」と訂されたのは、「月下の一群」の成立（昭和四十三年）に「十月三日受験半ばに持病の咯血再発、受験をあきらめて病臥」と記されていることに気付いたからだろう。

しかし、ここに一層の混乱を招くのが、大學青年が初雄に宛てた、「十月二十日」の消印をもつ一通の葉書である。そこには、

\*

御返事のおくれたことをおゆるし下さい。九月末に病に倒れ、それ以来ずっと病人になつてしまひ、昨日久々で初めて庭に下りて土を踏んだ様な次第なのですから。御希望のジャムの詩よろこんで書きませう。もししても少し丈夫になつた上で。今月の未来はまだ出ませんのですか。

「失はれたる夢の数は

われの心の落葉なるよ……」（傍点・引用者）

ロンドン駐在日本大使から本省へ宛てた報告書が読み上げられたが、「イギリスへ亡命中の孫逸仙が、清國政府の要請か、最近硬化した英國政府の圧迫に堪えかね、ひそかに日本大使館へ潜入、保護を乞うて来たが、いかが取扱うべきかとの請訓が主で、孫逸仙が語ったという、清國に於ける革命運動の模様なぞが、かなり細かく記るされていた」と、堀口さんはその内容をおどろくほど詳しく（おそらく正確に）記憶していた。

使いつけない毛筆のあがきがわるく、やつと半途まで來たと思うあたりで、〈残り時間あと十分〉と声がかかった。ああ、わが二年間の螢雪の功もこれで水の泡と消えんかと思ったとたんに、筆を持った手が動かなくなり、両膝ががたがたと震え出した。次の瞬間気がつくと、股から脚をつたって温いものが流れていった。小便をたれたのだ。あきれ且つはあわてて、止めようとするが、流れつづけて止まらなかつた。だらしのないのに自分ながらあいそが尽きたが、後年、この現象は自律神経の作用によるもので、脳神経の手におえないもの、武者ぶるいの一種だと知って、僅に自分を慰めたものだ。

「堀口大學全集」第七巻に収録の、この「とっときの話」は「執筆年月日不詳、未発表」で、堀口家の資料のなかから原稿のまま発見されたものである（新仮名遣いであることか

とあつて、これをそのまま信ずるなら、試験会場にすら出かけられなかつたことになる。あるいは、と疑う。この文面は、五歳年下の秀才に対して、受験不合格をカモフライユするものではなかつたか、と。意味深長な二行の詩句の曖昧さが、照れ隠しのようにも見えるのである。そんな乱暴な推理をするのは、ほかでもない、私の耳が聞いた堀口さんの直話を信じたいからだ。

それでも、十月三日以降のしばらくは、病臥していたことは事実だろうと想像される。「ジャムの詩」とは、初雄が「文明」九月号に載った大學訳「その頃」を読んでの訳稿依頼だったと思われる（のちに「ジャム詩集」の一冊をもつ堀口さんのフランス・ジャム訳詩の最初の一篇）。

青年の心理に錯乱を齎らす理由があつた。十一月には、父・九萬一が任地スペインから家族を引き連れて帰国するとの報が届いていたからである。

\*

九萬一は、息子の不首尾をどの帰港地で知つたのだろうか。かれにとつても、こころの重い旅路となつたに違いない。九月二十七日にスペインを発つて、大西洋航路でニューヨークに向かつた。さらに北米大陸を汽車で横断して太平洋岸に出たことが、「長城詩抄」の数首、「船発加的斯至紐育」「登摩天樓」「汽車過落山」などから知られる。

携家渺々度蒼洋  
尽瘁一官添国光  
杯酌三鞭呼萬歲  
海連天處祝天長

全家族を引連れ只今青海原を航海中です

役人として国威の宣揚に画して参りました

たまたま手酌のシャンパンで万歳を唱えております

海と天と連なる洋上で天長の佳節を祝しております

「太平洋上迎天長佳節書感」と題する一首である。天長節（十一月三日）までには、大學青年からか、外務省からか、あるいは後見人・武石弘三郎からか、いずれにせよ、受験の結果は電信で知らされていたものと考えられる。だが、この一首からは落胆した様子を窺うことができない。九萬一の強情を思うより、漢詩という詩型はなんと武張つたものか、と嘆ずるのである。大學青年の詩歌が新詩社ふうに色濃く彩られていたのと対照的に、九萬一の漢詩は真情が「武」に鎧われていて、そこに相似形に向き合つた父子の詩意識を思う。

九萬一が横浜に到着して、家族とともに大森望翠樓ホテルに入ったのは十一月十七日だった。

「十一月、父、任地スペインより帰朝、一年ぶりに病児を見、医師の進言を容れ、長男大學から、銀行家や外交官を引

型快男児は、なるなら一級の詩人になれ！」と肚のうちで一喝したに違いない。それが二人の間の默契となつたとは、断言できるのではないか。数カ月後、大正七年四月に堀口さん

の最初の訳詩集「昨日の花」が出版される。その刊行を積極的に後押ししたのは、九萬一の進言ではなかつたか、私にはそう考へられるのである。九萬一が、例の「牛刀」を抜いたのだ、と。

「読売新聞」十二月七日の「今年の詩壇の回顧（下）」といふ室生犀星による詩評文に、「耽美的傾向の詩人としてはウキンナから帰つた堀口大學氏なども、をり／＼の作はあつたが、とり立てて言ふほどの数でもなかつた」と出ていた。褒められている訳ではないが、「堀口大學」という詩人の存在は「耽美」のレッテルまで貼られて若い詩壇にはつきりと認められていたのである。些細なことのようだが、この僅か六十字の活字の力が九萬一を得心させる一助となつたと想像することもできる。

大正七（一九一八）年。

提帰從海外  
客館入新年  
松影庭前翠  
梅花盆衷妍  
小室靜於禪

「東帰雜詠」二十首を詠んだのがいつのことかは正確には判らない。一年前のスペインからの旅中吟に仕立てられていくる

出す夢を放棄、詩歌に専念するを許す」（『月下一群』の成立）と、堀口さんはまるで年譜の一行のように簡潔に記すだけだが、そこから、父の無念さを感じる辛い心情と、語れぬほどの潔謝の思念が伝わってくるのである。

二十五歳の息子は、外交官となつて、いまここから巣立つていく筈だった。父にはそれが、息子が三歳になつた頃から描きつづけた夢であり、計画である。メキシコ以来七年間のうちの殆どを間近に暮らして、父には（あるいは、父だけには）息子の能力、識見が外交官の任に耐えうるものであるとの確信（期待、というべきか）があった。当時八歳だった二男・瑞典は、九萬一の落胆ぶりは見ていて気の毒なようであつた、と回想している（母スチナのことなど）。

再受験を勧めようにも、病いの前には、いかに剛胆な九萬一もどうすることもできなかつた、と考えられる。そして、虚弱が亡妻から受け継いだ体質であると思えば、言葉もない。文弱な少年に育つたのも、母・千代（＝女だけの家）に預け放しにした結果だろうか。しかし、それは自らが責めを負うものでしかなかつた。……

詩人になる、といつても先行きになんの保証がある訳ではない。この先も生きる限り、負荷を任すように、将来への不安や病氣再発の惧れなど丸ごと抱えて、詩人という不気味な存在を護りつづけていかなくてはならない。

だが、そう肚を据えてからの九萬一は淡然たる様子であつたと想像される。五十二歳の若い父だった。この天晴れ明治

私喜天恩渥  
神仙若有縁

久々で海外から帰国し

ホテル暮しのうちに新年を迎えることになりました

窓の前には松が翠だし

盆栽の梅は見事に咲いています

大森もこの辺はひつそりして寺の境内みたいです

室内もまた禅堂さながらの静けさです

天恩の厚きを悦んでいる折からとて

何んだか神仏に無縁ではないような気さえしていま

「大正七年一月大森望翠樓客棧迎年」と題する九萬一の一首である。先に、淡然たる様子、と記したのは、この清澄な新一年の詩境を思い浮かべたからであった。

荷風「断腸亭日乘」正月二十日の条りに、「堀口大學來訪。其著昨日の花の序を請はる」とある。「昨日の花」の書名が、すでに用意されていたことを知つて、驚かされるのである。二十三日、「夜堀口氏詩集の序を草す」と記されている。

\*

のは、家族と合流した後、久しぶりに嗅いだ旅の海の匂いに刺戟されて詠草を淨書したためかと思われる。「時事新報」七年一月十、十九日に十首ずつが分載された。

ばら色の昨日のわれを思ひなく痛まし今日の灰色のわれ  
地中海紅海さくさては印度洋支那海すべて泣きて渡りぬ  
朝の海銀しづかねいろにかがやけば白妙を着ぬ君がまぼろし  
海のいろわれの憂うに似て黒き日と日づけして消息は書く  
思ひ出の如何にわれには親しきよいとへだたりて君しの  
ぶ時

などと、短歌では「ひとり遊び」のように、相変わらずの「明星」調に耽つてゐる。歌われてゐるのは、スペインに残してきたナルシスの魂である。彼岸に消えようとするヨーロッパの記憶を呼び戻そうとする懸命な試みであつたのか。

一月十三日、京橋南伝馬町のレストラン・鴻の巣で開かれた、日夏耿之介の「転身の頌」出版記念会に出席した。苛立つ思いで待ち望んだ第一詩集、私家版・限定百部が前年年末になつて、ようやく出来上がつたのだった。集まつたのは、芥川龍之介、北原白秋、三木露風、室生犀星、富田碎花、柳澤健、熊田精華、北村初雄、山宮允、森口多里、長谷川潔ら二十二名。

大學青年は早速、読後感を「三田文學」二月号に寄せた。  
「詩集『転身の頌』は、堀口さんが記したはじめての詩論で

### 肉身は四月の夜の月光の香氣中に溶解しめよ

この厳めしい擬古体に対して、青年は「日夏氏は公衆を度外に置いてゐる」と記す。「私は疑ふ、日夏氏の或作品の完全なる表情は、ともすると作者によつてのみ了解せらるるのではないかと。然るに私も公衆の一人である」と。

さらに、「私は思ふ、日夏氏の詩は了解せらるる為めよりは、暗示するたために書かれた詩である」として、「読者がこの集中の詩集を了解せんと企てるのが、已に詩神並に日夏氏に対する大きな冒瀆の一つかも知れぬ」とまで記してその超俗性をいうのだった。

とはいゝ、これからのはば十年間、堀口さんが日夏の、高踏的で妖しい詩学に魅きつけられなかつた、とは断言できない。どころか、これが大正期を通じて、日夏詩の最良の理解者は知らず、空前の美本である」と、長谷川潔へのオマージュである。

……高雅なそして近代精神に共鳴するこの画家の藝術に対して、私は久しい以前から、敬慕の念を傾けてゐた。今計らざしてこの七葉の挿画に接して、君の藝術の恒にそが独自のよき天鵝絨の道を進みつつあるを知つて、私は喜悦を新にする。

ある。  
冒頭にさりげなく記された「この氣稟のいかめしい心持のやさしい詩人の詩集を手にするは、……との言に、青年がこの詩人に「婦人魂」をもつ精神の同質性を嗅ぎとついたことは明らかといえる。

ただ、これが十全な批評文となり得なかつたのは、あまりにも異質な言語感覺の表出への戸惑いが、表面にあらわれてしまつたからだろう。しかし、それだけに、いわゆる「仲間褒め」の醜悪に陥らずに済んだ。「転身の頌」一巻はMONOOCCTAVEのピアノ」というのは、今日から見て納得のいく指摘といえるのではないか。「どの詩もどの詩も、どの章もどの章も、全巻を通じて読者の耳に上るは、同音階の上を走る、一絃琴の奏楽である」とは、この先も、日夏詩集の「最も痛ましい『弱み』の一つ」となるからである。

ここで大學青年が「読者の（そして私の）便利の為めに」と、抄録した日夏詩のうち一篇は「魂は音楽の上に」。

魂は音楽の上に  
狂い死したる女兒の黒瞳の追憶の契点に  
あゝわが生は色濃くきらびやかに映れりき  
わが喜悦はひそやかに茂林の間隙を漫歩りて  
心の吐息を愛でいつくしめ  
あゝわが七情をばかの積雲の上に閃き出る  
賢き金星に鉤掛け

「天鵝絨の道」の一語は、青年にはとつておきの讀辭だった。ここには、訳詩集「昨日の花」限定二百部の自費出版の制作に、敬慕する藝術家の協力を得ることのできた感激と期待の感情が籠められていた、と思うのである。「印刷所の選定、本文用紙の表紙のクロースの選択、購入、装幀を引受けてくれた長谷川潔君の挿画の彫師、金版の彫金家を探したり、依頼に廻り歩いたり、神田の鎌倉河岸にあつた製本所へは、何度も催促に足を運んだかわからない」（僕と書物）と、喜びにみちた苦労が始まるのだった。

しかし――  
二十六歳の春を、青年は幸福に浸りきっていた訳ではなかつた。屈折した思いに嘆まれていた様子も窺えるのである。日夏耿之介「堀口大學の藝術」のなかの回想的記述に触れて、私は愕然とさせられた。青年が、これまでに見たことのないような表情で登場したからだった。

……一九一八年正月元日、病身の筆者は僅かに病状を片付けて年賀の客に接してゐたが、この時裏口から妻に案内せられて入つて來た洋装の青年紳士があつた。見ればそれは彼であつた。彼は泥靴だらけにしてやゝ諷刺的な例の笑を帶び乍ら、元日に何處へも行く處がないから田舎の中を散歩して來たら泥だらけになつたので奥さんに井戸側へ案内して頂くのだと云つた。常套を脱しない人のよい細君は

元日に行處がなくて泥田の中を散歩する夫の友人を心から氣の毒に思つて連來たのであつたが、連れられて來た此ミゼラブルな紳士は冷たくなつたり焼の魚を横に押しやりにやにや笑つてあぐらを組んだままぱつり／＼皮肉を吐いていたが、……

その姿には、十四年前（明治三十七年）に死んだ辛辣皮肉な毒舌家、斎藤綠雨の生まれ替りかと思わせるものがあつた、という。

九萬一はこの正月を、他の家族とともに與津・東海ホテルに滞在して迎えた。「松帶初陽葉々青（初日の光を浴びて松の緑はいや深い）／如絵風光清見寺（清見寺からの眺めはさながら絵だが）」の二行を含む七言絶句が遺されている。「元旦に何處にも行く處がないから」とは、ひとり望翠樓ホテルに留った所在なきをいうのだろう。あてどなく、泥濘の道を歩き始めたものと思われる。

「やゝ諷刺的な例の笑」とあるのは、この前に、「諷笑」の一語が使われていたからだつた。

大森での日夏、長谷川二者との関係においても、「彼はさびしいエトランゼに外ならなかつた」と記されている。

子！ 青年の割に、その痛ましい自覚があつたことを知るのである。

それなのに  
君とは語る機を得ず  
あの出合いのすぐあとで  
僕はブラジルへ去つてしまふ  
そして五年も帰つて来ない

堀口大學は「幸福の詩人」として知られる。生來のオプチミストであった、と見られたからだつた。私もまた、それを疑う者ではなかつた。だが、堀口さんは、やがていつの日か毒性を払つて、"幸福の詩人"になつたのだ、と、日夏のこの一文に教えられた。

文中の「旧友」が佐藤春夫であることは、註するまでもないだろう。ここから、大正六、七年の帰国時にも、青年が春夫と何回かは会つて、とぼんやり想像されるものの、それを明らかにする資料は乏しい（例えば、長谷川潔は「回想録」に、大森で交流のあつた文学者のうちに佐藤春夫を数えているが、当然のこととして、大學青年から紹介されたのだった、と考えられる）。

六年一月に春夫は「星座」創刊号に短篇「西班牙犬の家」を発表した。「星座」は前年十一月、江口渙らと準備をはじめ、春夫が命名、表紙絵を描いた同人誌だった。四月、牛込

鋭い骨をも刺す計の諷笑は、しばしば友人達の嫌悪を買つた。この諷笑に耐へた者はその時筆者と長谷川と二人であつた。前者はこれに酬ゆるに最も赤裸々な批評の鉄槌を一下する事に於て、後者は恬然と氷の如き冷静の裡に談笑する事に於て。因つて僅かに友交を訂し得たものも亦旧友以外に此等二人のみであつた。此等一人は眞に彼の賦性を知り、その才を敬ひその欠を何らかの形式に於て通じるにいさゝかにも躊躇しなかつた。が、その交情は此時此程度にのみ止まつてゐたのである。多くの人の多くの交友と余り大差はなかつたのである。（傍点・引用者）

「諷笑」の一語は、私を刺した。この一文の一一行ごとが、私に冷や水を浴びせたのである。

詩人に青年らしい鬱屈した時期があつたと知るのは、なんの不思議なことではない。しかし、友である耿之介に「我まま然し寂しい心」を見抜かれた上で、さらにこう記されるまでの、毒性を孕んだ鬱の過剰を思う。皮肉な冷笑に、青年の孤立感の深さが感じられるのである。

ふと、「犀星詩人昇天の日（四だん）」の、

君は案外早くから 僕の軽薄を憐れんでくれていたようだ

という書き出し二行が思い起こされる。嫌われ者の軽薄才

**季刊文科 33**

KIKAN BUNKA 33  
【純文学宣言】

内昭爾 啓昭  
大河内 昭爾 啓昭  
駿浩介  
秋山 又松本道  
大松吉村

津村節子の世界  
津村節子×大河内昭爾

夫馬基彦 [喜界島]  
小沢昭一 加賀乙彦 岡井隆

定期購読料：(4冊分) 4000円  
郵便振替：00191-6-88230

SINCE 1982  
choeisha CO.,LTD | 烏影社

TEL. 0266-53-2903 FAX.0266-58-6771

URL <http://www.choeisha.com>

五軒町から上野クラブという東照宮下のアパートに移り、六月には「黒潮」に「病める薔薇」を執筆、「田園の憂鬱」の構想が練られていた。

谷崎潤一郎と知り合ったのは六月のことだが、同月二十七日には、レストラン鴻の巣での芥川龍之介「羅生門」の出版記念会で発起人を代表して閉会の辞を述べている（同会には、日夏耿之介も出席した）。

と、散文（＝文壇）の方へと急速に接近していたのだった。七年二月現在は、「有望にして、いまだ現はれる作家」の一人である（中央文学）の同題のアンケートに馬場孤蝶が春夫の名前を挙げた。

やがて七月には、谷崎の紹介で「中央公論」に「李太白」が掲載される。つづけて九月、「田園の憂鬱」（中外）、十一月、「お絹とその兄弟」（中央公論）と、初期を代表する作品を矢継早やに発表、たちまちのうちに新進小説家としてのかがやかしい出発を遂げることとなる。

\*

大森望翠樓ホテルを引き揚げ、一家揃って市外中渋谷の南平臺に移居したのは、七年一月の、おそらく中旬以後のことだろう。

二月から嘱託として浅野合名会社（造船所）に就職することになつたのは、九萬一の工作によるものだらう。M・マルチムというフランスの汽船会社との連絡（通訳）に当たる

とりの易者から、神祠をつくって屋敷神として祀れと勧められ、潔は庭の一隅に小さな社を建ててそれを安置することにした。その建立を記念しての集まりだつた。

参考したのは、北原白秋、日夏耿之介、堀口大學、富田碎花、柳澤健の詩人五人と、石井直三郎（歌人）、松永信（ロシア文学）、大野隆徳（洋画）、森口多里（美術評論）、大田黒元雄（音楽評論）、田中喜作（浮世絵研究）、そして日本画の川端龍子と小林古径。西條八十と山宮允は欠席したが、弟・弘も加わって総勢十五人となつた。潔の回想録には、

玄々至妙の高踏的詩境からしてこうした場にはびつたりの日夏耿之介が、おもむろに懷中から、用意してきた自身の祠詞をとりだし、読みあげることから式ははじまつた。しかししながらその祠詞たるや、凝りに凝つた難解なる漢字の羅列であつて、仲間うちで博識をもつて鳴る面々でさえひとりとしてこれをまとめて解するものなく、一同肅として声なく、ただ顔を見合わせて驚くのみだつた。

と記されている。潔には、當時すでに漠然とではあつたが、神秘への志向が現われはじめた、という。「このかたむきがあればこそ、このすぐれた神秘家の詩人と心琴をひびかせあうことができたのだつた」とある。

森口多里は、日夏の名前と自分の名前を入れた千社札を手刷りで造つて、界隈の路傍の神祠などに貼つたりしている。

のが仕事だった。月給は三百円、と破格の高額（週刊朝日編「値段史年表」によると、当時、高等文官試験に合格した公務員の初任給が七十円）。なんとなく、ブリュッセルでのペルギー国立銀行勤めが思い出されるのである。いつまで勤務がつづいたかは不詳だが、月給は蓄えて、「昨日の花」はかかるの自費出版の費用に当てた、とされる（『月光とビエロ』）。

行き帰りの途中、古杭木の駅柵に沿つた道の曲り角の一軒に、正富汪洋、新進詩人社と、清新らしい二枚の表札が掛けられていた。「六十年以前新詩社で同人たちは噂に聞いた人の姿ならぬ影を見たような気がして、びっくりしたことを覚えている」（『汪洋追憶』）とあるのは、正富汪洋と再婚した與謝野寛の前夫人・瀧野が、口癖のように一日に何度も「與謝野より偉くなつて下さいね」といって、汪洋を励ましていふとの「愚にもつかない噂」を耳にしたことがあつたからだ。「毎日のようによく通る道筋だが、正富家はいつもひつそり閑としていて、あるじ達の姿も、出入りする若い社人らしい人達もついぞ見かけたことはなかつた」と記されている。この先、汪洋から寄稿を依頼されることはなかつたが、雑誌「新進詩人」は多年にわたつて寄贈を受けた、といふ。

二月三日、大森山王の長谷川潔邸での「稻荷まつり」は、近代文学史また美術史における有名なエピソードとなつた。ファンタスティックな秘儀めいた一日が、大正ルネサンスの芸術的雰囲気を端的に示した例とされるのである。

長谷川家には先祖伝來の白狐の彫像があつた。ある日、ひ

「明治大正の洋画」には、この一日のことが詳述されていて、それによると、祭りの凝つた演出の一切は、催主・長谷川潔自身が宰領したものだつた。黄色の支那紙に式次第のプログラムを刷つたり、赤い支那紙に祝宴の献立を自刻の木版で刷つたりした、といふ。「階下の座敷に於ける晩餐は特に支那料理屋からの出張調理で、僕ら書生つぽには全く豪華なる珍味であつた。それに先立つて、白木の絵馬に各自が揮毫して、それを携へて庭の小祠に参詣して一人々々奉納した」と回想されるのである。

この狂宴のよくな一日を、大學青年がどんな感情をもつて過ごしたか、堀口さんにそれを物語る記録はない。

柳澤健が北村初雄に宛てた二月四日・消印の葉書に、「堀口君が十八日の春洋で渡米することを、きのふ大森でききました。さみしくなります」と記されていて、一時は九萬一の周辺に外務省の指令によるそんな慌しい動向もあつたのか、と思われる。ふと、父・九萬一に詩を書くことを許された青年が、明日の行く方も自身では決めることのできない、言葉通りの、宇宙らりんの漂泊者となつていて、ことに氣付かされた。「世界児」の「我まま」の起因するところの一つであつた、といえるのかも知れない、と。

大正七年四月は、訳詩集「昨日の花」の誕生をもつて記念される月である。

長谷川潔装幀による、天金、地小ロアンカットのクロス装  
上製本は貼函に収まつて、清楚な印象の、しかし堅牢な一冊  
に仕上がつた。奥附には「大正七年四月十五日發售／發售  
所・糸山書店／著作兼発行者・堀口大學」とある。四六判・  
二三六頁、定価一円五十銭。

内容は「サマン詩抄」「クヴルモン詩抄」「シモモン」「ウルモン」『昨日の花』の四章で構成され、「昨日の花」の章には、ヴエルレーヌからボードレール、フワイユ夫人まで十六詩家の計二十四篇が並べられている。

「無数と言つてもおかしくないくらい数多いこれまでの自著中、いま思い出して一番なつかしいのはやはり、大正七年の四月に、柳山書店に発売を依頼し、自分で世話をした二百部限定の自費出版、訳詩集『昨日の花』だということになりそうだ」と、堀口さんは「僕と書物」（昭和五十三年）に記している。

初めての出版の喜びを、何倍にも大きくしたのは、荷風による序文「詩集昨日の花のはじめに」だった。「志を詩歌にして、行手さだめぬ冒險の迷路にいでたとうとする二十六歳の著者に、これ以上の感激が在り得ようか。それは僕にとつての錦のみ旗だった、恩賜の御衣だった、天人の羽衣だった」と、丁度六十年の昔が回想されるのである。

の悲しみを慰めたまひき。その選びとりて翻訳せられしものおのづからその折々の君が心にいと近くいと親しきものなりしや言ふをまたす。然りとすれば此翻訳一巻の詩は君を知るわれ等に取りては荳只に尋常一樣の翻訳詩とのみ看過ごすべきものならんや。昨日の花はまことにこれ君が深き思出の花ならでやは。(傍点・引用者)

「異なるものは」の一行を、日夏耿之介は「訳詩の真髓を道破した言葉である」（堀口大學の藝術）と記している。書き写しながら、見事な文章であることにあらためて感嘆させられた。明日の朝、命はても惜しくないと感涙にむせんだ、という堀口さんの表現（僕と書物）を、大袈裟なものとして笑って突き放すことはできない気もするのである。

四月から五月へ――  
しかし、「昨日の花」一巻を上梓したことで、青年が有頂天になつた様子は窺えない。

「詠詩集『昨日の花』は『海潮音』や『珊瑚集』に次いで啓蒙的使命を帯びて而も充分に成功せるものと信ずる」（幸福な「フィガロ」大正八年）と評価した日夏は、また、「昨日の花」が糉山から出た。勿論自費でなければ詩集は出せなかつたのである。数は五百であつたが、売れなくて、永く糉山の厄介物であつた……」などとも記すのである（堀口大學の藝術）。

るだろう。  
序文は六百余字。ながい引用となるが、やはりここにその全文を掲げておくべきと思うのは、そこに、翻訳観ともみるべき、訳詩についての師の訓えが暗示されていた、と考えられるからである。